2014（平成 26）年度 文学研究科自己点検・評価報告書

【１】ラーニング・アウトカムズの測定状況

文学研究科の博士前期課程・修士課程では『大学院要覧』において公表されている修士論文・リサーチペーパーの審査基準が、全体としてのラーニング・アウトカムズを示している。専攻や専修によって多少の違いはあるが、文学研究科としてほぼ同じ内容をあげている。たとえば教育学専攻では、つぎのようなものである。

１　研究における問題意識が明瞭であり、目的に応じた方法がとられている。
２　先行研究への理解をもち、論文に独創性があり、また発展性をふくむものである。
３　章立てや展開が論理的になされ、内容的にも充実している。
４　文献や資料への理解をもち、引用や注記の仕方、参考文献の表示などがルールに則っている。

また、博士後期課程では、以下のような博士論文の基準を示している。

１　テーマの独創性とその意義の明示
２　当該学問領域への貢献
３　先行研究の分析と評価
４　論文構成の適切さ
５　内容および文章の論理性と明晰さ
６　文献使用の適切さおよび読解の正確さ
７　註および参照文献の適切さおよび充実度
８　提出論文における自己分析と今後の展望

こうしたラーニング・アウトカムズの項目は、文学研究科が目指している、「本学『建学の精神』のもと、人類が開発・蓄積してきた知恵や学術的知識としての文化を継承し、社会において応用・発展させていくこと」と整合的であり、研究科の理念とも合致している。

また、教育学専攻臨床心理学専修は、日本臨床心理士資格認定協会による第１種指定大学院である。このため、定期的におこなわれる同協会の認証評価により教育水準の一定化がはかられ、講義内容のチェックがおこなわれる。こうした外部機関による認証評価もラーニング・アウトカムズについての関心を高めている。また、臨床心理士資格試験の合格率が全国レベルからみて講義内容を測定する役割も果たしている。

【２】ラーニング・アウトカムズの適切性の検討状態

ラーニング・アウトカムズの適切性の検討は、文学研究科全体としては、「文学研究科評価分科会」においておこなわれている。しかしながら、こうしたことへの関心は、専攻や専修により違いが大きく、必ずしも全体的な関心事とはなっていない。

教育学専攻臨床心理学専修や国際言語教育専攻の日本語教育専修や英語教育専修では、修了時の到達レベルについての一定のコンセンサスが形成されており、具体的な講義内容や科目相互の関係性についての議論がおこなわれて、ラーニング・アウトカムズの適切性についての検討が盛んにおこなわれている。これに比べ、後期課程を有する英文学専攻、社会学専攻。人文学専攻、教育学専攻では、５年間の在学を前提とし、博士号取得をもって教育成果する意識が強く、ラーニング・アウトカムズの適切性についての議論が充分ではなく、それぞれの講義科目についての位置づけや科目相互の関係性についての検討も十分とはいえない。

特にシラバスにおける講義内容や授業目標の提示が、ラーニング・アウトカムズの測定可能な形式となっていないものもある。各専修の必修科目や毎年複数の履修者がいる科目に比べて、履修者が毎年１名程度あるいは数年に１名という科目ではそうした傾向が強い。こうした科目では、当該履修者の関心に応じて講義内容の変更がおこなわれる場合が少なくなく、そうした変更が提示されるシラバスなどに反映せず、当該科目のラーニング・アウトカムズの測定が困難になっている。

ラーニング・アウトカムズの測定のためには、担当科目の講義内容を測定可能なものとして記載する必要があることを再確認する必要がある。シラバスにより正確に講義内容を記載することを、ＦＤ活動の展開の中で確認し、研究科全体の活動として取り組みたい。ラーニング・アウトカムズの適切性を検討する重要なプロセスとして、講義実態を反映したシラバスにより講義目標に対する講義内容の妥当性を検討することおきたい。そうした測定・検討により、ラーニング・アウトカムズの適切性を研究科内で検討・評価することが、研究科における教育の質保証につながることを研究科の了解事項とし、研究科における教育活動をより充実させていきたい。